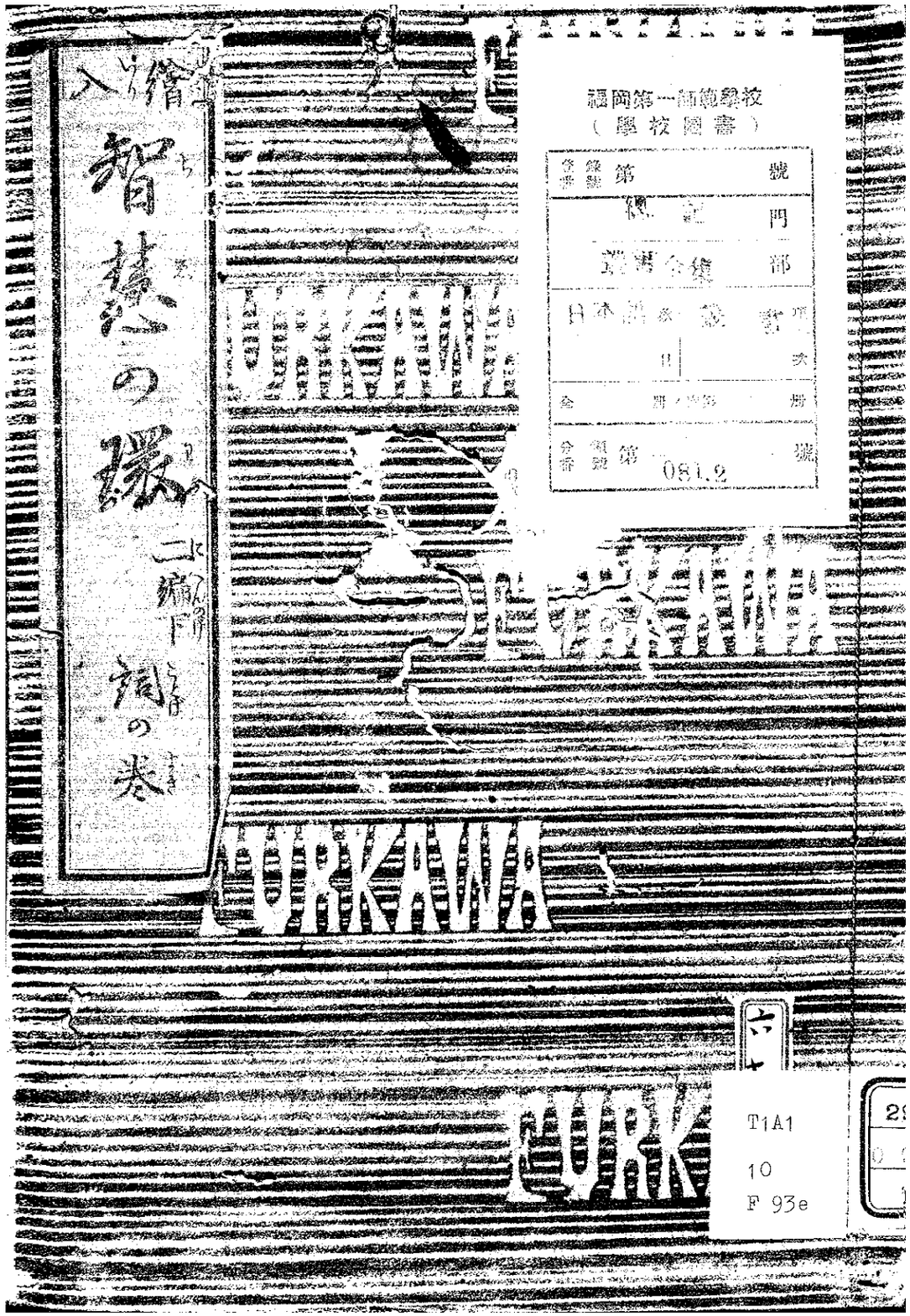
福岡第一師範學校
（學校圖書）
081.2
T1A1
10
F 93e

図書　和図書　遡
a1380321095a
福岡教育大学蔵書

ものの名

二編下

詞の巻

○母韻子韻のこと

母韻とそアイウエオのいきの音なり。

子韻とは四十五音のこと なり

みぎのいつのこゑより。のこゑ四十五音をうまるもの なり。いきのこゑハ母のごとく。四十五おんを子のごとし。こゑより

母韻子韻とは音といふもおなじやうなるこゑと

考る所

まことぼいんのことを単音といひ。志いんの。ことを複音と云ふ。その単とハ ひとつの。複音 ふたつのといふこゝろなり。ぼいんハ ひとつの こゑ。志いんを ふたつの こゑ あきべあり

このひとつへふたつといふこゝろを ちがへむ

ア。まゝアイウエオをひらがゝ ふたつ たび。こゝろむべし。アをいつまでもアハ こゑ こゝせば。イハ いつまでもイのこゑ こゝ ウエオも こゝ かくのごとくあるべし。こゝき

ひとつへ ある ある し あり

ぢぎぶ カキクケコを ふだくしびこゝろ

むべし。カハ アヨリ ふたつ。キハ イヨリ ふたつ。

クケコウ ふかす。ケハ エ ふ。コハ オ

ふかるべし。すべて ふつうサのくだり。タのくだり

乃 こゑ むども こゑ 点をアイウエオ ふ

うかる あり。されど 四十五ぼんを こゑ ふたつの

こゑ ふりて ぼいんとうはく 志ぼしこゝを

はてこの ふくぼんの かきあらはる ふかい。あり

こと むべきべ。つぎの 濁ん ふこゑ 考へべし

ふこゝろの　ゝ

○かぎりふ　かぎりふ　かぎりふ　かぎりふと　いふなり。

たゝとゝ　ふ　かぎりふ　かぎりふ　ひとりはひと。まことを　ひら門

かぎりふ　ゝ　ひとりはひと。まことを　ひら門

のゝ　ふのゝ　こゝろ　ゝ　ふ　ゝり　たゝへゝ

金時　東京　富士山　利根川　ふと　の　ごと

かゝひれ　ゝ　おくのひと。まことを　りの　ゝ

こゝろ　ふ　ゝり。たゝへば　人。獣。草。木。男。

女　など　の　ごとし

○ふこゝろの　ゝ　ゝ

ふこゝろの　ゝ　ゝ　人稱。性。單複。おゝび

年格の　ゝ　ゝを　いへる　ゝり

人稱の　こと

みづから　ゝが　ふを　ゝ。ひと　ふ　おゝひて

ゝの　ふを　ゝ。はゝこひとの　こと　を　はふし

ゝる　に　ゝの　ふを　ゝ　こと　ゝり。この

ゝ　ハを　人稱　と　いふ。人稱　ゝ　ひとの

[illegible]ハ[illegible]ト[illegible]ハ[illegible]ヲ[illegible]ハ[illegible]
みぎの みつの [illegible]人 を 第一人稱。第二人稱。
第三人稱 と [illegible]く
第一人稱 そ みづ[illegible]の [illegible]人 [illegible]。たとへば
源義經。[illegible] [illegible]し [illegible]る 意遠 ハ
[illegible]の [illegible]。みづ[illegible] [illegible]の [illegible]を [illegible]。
その [illegible]を 第一人稱 の [illegible]と [illegible]
[illegible]。この の 義經 [illegible]を [illegible]第一人稱
の [illegible]ば [illegible]
[illegible] [illegible] 臣 [illegible]と [illegible]を

[illegible]。[illegible] [illegible]か 何の誰 と [illegible]
[illegible]も 第一人稱 の [illegible]ば [illegible]
第二人稱 そ [illegible]ふ [illegible]の [illegible]。[illegible]
[illegible]ハ [illegible]人 そ [illegible]。
その ひとの なを [illegible]ぶ を [illegible]。たとへば 太郎 ハ
[illegible]ひを せよ の ごとし。この 太郎 を
第二人稱 ハ たとへば [illegible]
[illegible] [illegible]み [illegible] 何の誰 と [illegible]
[illegible]。第二人稱 の [illegible]
第三人稱 そ ひとの なを [illegible]。たとへ

「清少納言がかけるもの」

清少納言もの

たべて　ものの　ものいふ人と　ひとに　むかひての
ものいふ人の　ものは　ふ。ひとや　ものは　ふを
以　ものを　かくを。ものふ　第三人称　の
ものと　ものべし

性の　こと

性　ものつきと　いふ　ものの　ものを。

おのものを　ひとや　ものふ　ふ　男女の　ものつき
ものふ　ふ　ものを。ものこそば　ふも　男女の　ものの
一き　ものの。ものこそば　ものを　男の　ものつき
ものを。ものは　ものを　ものこそば　ハ　男性の
ものこそば　ものの。ものは　ものを　女の　ものつき
き　ものを。ものは　ものと　いふ　ものこそば　ものを　女性
の　ものこそば　ものの
みぎの　ごとく　ものの　ものを　いきとし　いける　ものは
ものを　いふも　ものの。ものは　ものを　ものの、
ものふも　男女の　ものの　ものの。ものを

ひだりうまれがごとし

男性の事

男　夫　父　祖父　伯父　兄弟　息男　姪男

女性乃事

女　婦　母　祖母　伯母　姉妹　息女　姪女

祖父母のこと

舅　姑
帝　妃
下男　僕　下女　婢
僧　尼

まめを少しくこゝをまゝ
つけて。男女を弓人ろ
ひだりのごとし。事なり。

女性の事

牝牛
牝馬

男性の事

牡牛
牡馬

牡犬　牝猫　雌

めぎ

をぎ

雄

をぎ

をぎとは男女陰陽とし。男を陽とすること
つねなり。陰を女性のたとへ。陽は男性
のたとへとす。○日を太陽と
いひ月を太陰といふ。男女ともに
ていふなり。されど日と月とを太陽と

男性の女性のたとへ

もおなじ　うなぎ　ふるを　をぎ　ふるをぎ
男性の　ふること　月を　月と　太陰と
いふも　ふるをぎ　女性の　をぎ

このをぎ男女ともに中性のを
ふること　といふ中とそ　今うのまこと
といふこころなり。たとへば人。子。鳥。木。など
のごとく　こと　いふ男性　ふも　つゆ　女性　と
も　性なり。をぎも　中性の　こと　と
このをぎ　をぎこと　をぎと　をぎ　をぎと

男性　女性　中性の名

単複の名

のもに うだしたる。そしこれを あるを 複称 とそ
おかれも こゝろまども。 また
いくさに

この おい 単複の ものハ きたこと
ものも ものの。一人。諸人。一歳。千歳 おどの ごとし
ものも ものの。 統稱 ものを おくの ものを おべを
ひとつ ものを ごと いくさを ものの たたへを
人。獣民。群 おどの ごとし この たらひ ものの
ものを ものを いと おかの 統稱 とそ
おなじこと ものを いくさ こゝろ おり

格 の こと

格 とそ ものの と いふ こゝろ なり。おくこと
ふいの ものの さだまり ものの。第一格 第二格
第三格 第四格 おのび 獨立格 の いつ おり
ものの こゝろづくり なり。おくこと ふ かの ふを の
ものを つけく いへり。 ものが なり とやう ふ
かの ものを 第一格 おり。 ものの こゝろ
ものを ふの ものを つくを 第二格 おり。 ふの
ものの ものを 第三格

なり。はさ　はつるを　第四格　なり。

第一格　ふがを　つくるを　はるるの　ことばづゑ

ふおかし。ふをかく　まを　なるの　を

はけざる　ことなり。たとへば　とりあへの　ぼと

まさ　みやびことば　ふを　が　とおぼし　をろ

まのを　もちふる　あり　はるのちまん　など

はぶ

この　なり　第一格　まくもぞやろこを　を

はくる　ことおかし

第二格　の　はとおぶじ　をろまが　をつくる

ことおかし。こを　第一格の　が　とを　おぶじ

をろ。たとへば　はうえが　ふ　まつが　えん

ためが　した　などのごとし

第三格　乃　ふと　おぶじ　ぶをろまへ　を　もち

ふる　ことなり。　みぎへ　ひだりへ　の　ごとし

なるひを　第三格　まに　おもへ　おも　つけざる

ことなり。　ひとの　がり　まく　などの　ごとし

はと　第三格　の　ふまいも　ぞや　こを　を

はるる　ことなり。　ひとまを　ひとにも　ひをまぞ

ひとや　ひとを　ことの　のごとし

第四格の　を　我　なぐ　ごと　なり。たとへば　ものを　おもふと　ものの　ごとき　ものを　ものおもふ

と　ものの　ごとし

第四格　乃　を　ふも　ひと　を　ひと　を　ひと　を

ひと　を　や　ひと　を　ことの　ごとく　いもぞや

ことを　つくる　ことを　なり

なり　の　ごとき　ひとを　の　つを　なり

なり　を。第四格　なり　と　なるべし

なる　なり　ふる　なぐ　を　なり　格

なり　歌仙。人麻呂　の　ごとし。なり　大坂　と　いふ

ことを　とやう　なり　の　つく　ふことば　を。

なり　の　ふことば　と　おなじ　格　なり。この　ものを

大坂　と　なる　の　ふ　なる　を　第一格　なり　なる

大坂　を　いふ　ことの　大坂　と　いふ　を

大坂　に　いふ　ことを　と　やう　ふ　いふ

ことを　も。ふる　なり　の　なることば　の　格　を　なる

まて　第二格　ふも　第三格　ふも　第四格　ふも

なることば　なし

なる　ふる　を　なたと　なる　ふる　を　なる

と云ふのごとくとは仮名を。仮名の書ぶ
や書ぶし格なり
獨立格とそひらがなの格と云ふこころを。
この格のことばをかなのことばとゆう
ふくかたことばをもりて。かく書ぶるもあり
たとへぞ太郎。おまへを笑ひを云ふの
ごとし。こゝの太郎をかなのことばとゆうを
ふまたぶよびかなのことばかして。をもてちち
ひらがなの格なり
かくよびかくるに太郎よ太郎やのごとく。

上はゆくそやの字をはぶけてゆくをかな
こそ獨立格とは仮名文字あると言べし
第一格のそもぞのやからこそあるべし 第三格
第四格のそもそやこそとはのくはぶけるな
むすびのことば
やうかしこし
ものを書とかきものを書ものを
人名とゆうを書とそ

孝行のさまし

凡世間に一つの人。貴と賤と有り。父母の恩をよく覚えざるは人やある。ちなみぞ父母を我身の出来し本なりぞ。本をば忘るべからず。況や養育乃恩。山よりも海よりも深し。今孝心を起こすべ

少ふるぞ。父母の恩を先十月の間懐胎より産まれ。母幼稚の小ども

我らしむ。ちなみに生まれ出でぬ。父母ともに晝夜艱難辛苦をいとわず。常に病ある風をいたはり。少も病あらば煩そうけるぞ。神に祈り鬱をなす。我身もかくなるべき思ひ。そなた子乃息災ふしぎ。

成長を待ち外に何の願ひなる。其子稍長ずるに
ぞ。その為に師を撰び。藝をおしえ。
人となるを知り
ぬ。家をなき
むるおもひなぞ。

を心ある婦を迎へて。先ず妻を
立てゞ妾を娶る。又世に
或は一妻多妾
の難あるを。
こゝ皆でも。
一生の
何事
何事の
子孫絶えぬ時や
是等は

たとひ報じ尽くすべきも世を孝行をも養ふ事を。其孝行と以上を貧富貴賤を不同なれども父母の衣食を結構よせ必ず相應す。父母の飽煩なるやうに尽べし。父母年たけて後を大事を側をそなへ其をなをうし給をかなへ。

朝ハ衣ハ志づめ。晝ハ父母もし病あしき。晝夜帶を解て他事を捨て看病し。醫藥のことを心を盡すべし。第一孝行なり。

以の者父母乃身を孝養せゝ。其心を安ぜしめて。大なる不孝といふべし。何事も父母の教訓ふたがはず。世法をおんじ。よく身を守り。家をたもつべし。其子のたゝのごとくあるをもて。父母は心中いかゝの安堵。以の角どの是を父母の志を養ふと以ふ。

なで常ふ於すべし。なをむべきを父母存生の日なるこゝを。今この時不及で孝養をゆるがせ。父母死して後。ゆるに悔るかゝる事なり。たとひ山海の珍物を求へて肉祭るとも。いかゝ時の蔬菜なほ如しべし。いかゝ今乃世の人父母の養を大切の事ふおもはるゝや。前段の妻子なりとも妻子

を失て又も得べし。なを一しび失て物尽び得難きものを父母なり。人のなかなるものを是を捨いかゝ孝心起る事なし。今の世や孝心なりとも人も。大なる妻をめゝ子をもなる身ふかゝぬ。眼前妻子乃愛はひの目て。松のこゝろ朝夕の動内へ考をもやし。ゆゝだよ中松なほ。なをふもまぬ妻子

かゝへぞ。以て孝行父母の一切なることを
我に示すなり。其言葉耳より入り。心ふ
かくれぞ。已に父母をうれ心耳
ありめ。こゝ。以ふも行爲したこと
ぞ。我身十四五歳より
ぞは妻や以ふものも所し。子や
以ふ、その時と我成
養育せし人そ示ふ人ぞや。我を

介抱せー人を何人ぞや。鈴る子父母に孝を尽人妻子を捨て孝を
あら。鳥の鳥は人反哺也。
親に孝をつくしたと以て孝行。
人として不孝なる人。人倫
本心を失ふて。禽獸に落ぶ
たる也。以て孝行
こと也。

みまの はらとて 室直清 と云る 人の
かゝける 六諭衍義大意 の うち ようぬ
きがも ようる こゝの ゆゑ。 そも世の
ようべ小 孝の道を ときしめ かゝそ
この 文章 を おぼえ おきの ちくの
詞の 巻 は この 文章 は 句 或
ぶんしつ。 こゝば ぶうひの 例 を
たゝて。 こゝば ぶうひの 書を かきて
むる小 ようもし をむが ため
なれ。

三編下終

明治四辛未年二月
同六年五月再版

古川氏藏版

賣弘所 岡田屋嘉七